

Title	中国におけるキリスト教本色化運動：誠静怡についての考察
Author(s)	徐, 亦猛
Citation	アジア・キリスト教・多元性 (2008), 6: 87-96
Issue Date	2008-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/57709">https://doi.org/10.14989/57709</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

中国におけるキリスト教本色化運動  
—誠静怡についての考察—

アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会  
第6号 2008年3月 87～96頁

中国におけるキリスト教本色化運動  
—誠静怡についての考察—

徐 亦猛

中国における本色教会についての討論および実践は、19世紀後半から倫敦会・公理会・長老会を中心として始まった。しかし本色教会が中国人自身による運動として促進されるのは、1920年代からである。1922年5月、第五回キリスト教全国大会が上海において、「本色教会」(Indigenous Church) という主題で開かれた。「本色教会」とは、外国の保護・支配から離れて自立し、中国固有の性格を備えた「中国教会」を意味する。その大会以後、「本色教会」という言葉は中国キリスト教界において大流行し、結果として教会の本色化運動にまで至った。当時の「中華基督教協進会」(The National Christian Council of China: NCC) は本色化運動の大きな促進力であり、1927年に成立した長老会、倫敦会、公理会を中心とするプロテスタント諸教派合同の全国最大の組織である「中華基督教会」は、本色化運動を実践した教会であった。この二つの団体と、最も緊密な関係をもつ人物が誠静怡である。誠静怡(1881-1939)は中華基督教協進会の総幹事(1922-1933)であり、同時に中華基督教会の会長(1927-1934)でもある。彼は近代中国教会の中で、国内外で最も尊敬された、代表的な教会指導者と言える。彼はすでに早い時期において、中国教会が過渡期の状況にあると判断し、本色化中国教会を建設することを積極的に提案した。彼は中国教会の実際の立場から出発し、教会の主導権を西洋の母教会から中国の教会へ移行する方法を考え出した。すなわち、西洋の母教会は中国の教会に教会の財政と管理権を渡し、中国人キリスト者は自分の教会を運営し、自らの力で責任を持って、教会の行政と奉仕を負担する。この教会の変革によって、真の中国キリスト教と教会の自治(self-governing)・自養(self-supporting)・自伝(self-extension)が実現するとしたのである。

山本澄子は、すでにその著作『中国キリスト教史研究』(1972年)において、誠静怡のことを扱い、誠静怡の代表的論説「本色教会之商榷」を通して、その思想の中心点を明らかにした。しかし確かに、『文社月刊』創刊号(1925年10月)に掲載された「本色教会之商榷」は誠静怡の思想の代表的論説であるが、このような代表的論説に限定して、誠静怡の全体の思想を論じるには限界がある。誠静怡にはすでに早い時期、特にエディンバラ宣教会議の刺激を受けて、本色化思想が芽生えていた。さらに彼は「本色教会之商榷」という論説を基礎として、ナショナリズムが盛んな時期において本色化思想の実践的な考えを展開した。<sup>(1)</sup> 本論文では、誠静怡のキリスト教本色化思想と実践の特徴を明らかにしたうえで、彼の思想と実践を新たに評価したい。

(1) 山本澄子『中国キリスト教史研究』、山川出版社、2006年、263 - 270頁、卓新平編『中国基督教基礎知識』、宗教文化出版社、2005年、280頁など参照。

## 1. 誠静怡の生涯

誠静怡（字、敬一）は満州族の出身で、1881年に北京に生まれた。彼の父は思想開明な人で、当時の同族出身の清朝政府の政策に不満を持ち、清朝政府からの給料を受け取っていなかったため、一家の暮らしはたいそう貧しかった。ある日、彼の父は病気のためにキリスト教病院へ入院中、マルコ福音書を読んで、イエス・キリストの十字架上の犠牲に深く感銘を受け、キリスト教へ入信した。その後、北京の倫敦会（London Missionary Society）教会の牧師として25年間奉仕をし、家族全員キリスト教入信へと導いた。<sup>(2)</sup> 誠静怡は、小さい頃から父の影響で、北京の倫敦会に属する英華書院で基礎教育（中国伝統教育とキリスト教教育）を受け、1896年卒業後、天津の養正書院で神学を学んだ。しかし1900年の卒業の際に、ちょうど反キリスト教・排外運動である義和団の乱が起こったため、誠静怡一家は北京の東交文巷の使館区へ避難した。1903年に倫敦会の宣教師 George Owen と一緒に新約聖書の翻訳のために英国へ渡った。誠静怡は、優れた中国語と英語の才能によって、1906年に翻訳の仕事を終え、彼の傑作とも言える中国語の新約聖書を無事に出版した。続いて、彼はスコットランドの聖書神学校（Bible Training Institute）へ入学し、1908年に学業を終え、中国へ帰国し、倫敦会の北京東城米市大街教会で牧師の按手礼を受け、その教会の主任牧師に就任した。<sup>(3)</sup>

1860年のリバプール宣教会議以後、Henry Venn と Rufus Anderson が提起した「三自」の宣教理論は19世紀後半のプロテスタント宣教運動の主流思想となっただけではなく、世界各宣教地においても実践された。1877年5月上海においてプロテスタント宣教師全国大会が開かれた。その会議中、特に注目されたのは現地教会の「自養」についての問題であった。<sup>(4)</sup> 中国にいる宣教師たちはリバプール宣教会議の「三自理論」をふまえて、教会「自養」の問題について、熱心に討論した。さらに、1907年に上海で開かれた第三回のキリスト教全国大会においては、1877年と1890年のキリスト教会議で討論と実践したことをふまえて、現地教会の自養、自治、自伝も大きな議題として取り上げられた。このような国内外のキリスト教宣教の動向の影響で、誠静怡は1910年英国エディンバラで開催された第一回世界宣教会議に中国代表として参加して以来、積極的にエキュメニカル運動と、中国のプロテスタント諸教派の連合・合同と本色化運動を指導した。彼の指導と働きによって、彼の在任していた北京東城米市大街教会は早くも経済自立を実現した。1912年誠静怡は基督教中国諮問顧問委員会の総幹事として選ばれ、全国各地へ足を運び、プロテスタント諸教派のミッションの責任者及び教会の牧師を訪問し、中国における諸教派の連合・合同についての可能性を模索した。エディンバラ世界宣教会議における全教派の一致と宣教協力という精神を促進するため、1913年J.R. Mott を迎えて、上海で第四回基督教全国大会が開かれた。大会中に熱心な討論の後、「中華続行委辦会」（The Chinese Continuation Committee）がつくられ、誠静怡は初代の中国人の総幹事として選ばれた。1916年に封建的保守勢力は、辛亥革命の後に儒教を再び国教にすべきであると主張したが、誠静怡はキリスト者の立場から強く

(2) 誠榮慈「懐念親愛的父親誠静怡」『金陵神学誌』、第9期、1998年、91頁。

(3) 卓、前掲書、280頁。

(4) 山本、前掲書、26－27頁。

反対し、民衆に信教運動への参加を呼びかけた。1919年12月に「中華統行委辦会」が外国人と中国人とのキリスト教指導者を招聘して、中国におけるキリスト教会の使命について意見を求めた。その結果「中華婦主運動」(China for Christ Movement)が始まった。<sup>(5)</sup> この運動は、信徒の信仰を深めること、キリスト教教育を家庭・学校・教会において強化すること、中国人キリスト教指導者の養成、信徒の識字教育、未信者に対する伝道などを含んでいる。誠静怡は終始この運動の提唱者であり指導者でもあった。誠静怡の指導のもとに、全国で中国語と英語の『中国基督教年鑑』(China Mission Year Book)と『中華婦主』(China Occupation)という雑誌が出版された。1922年に開かれた全国基督教大会において、誠静怡は大会の議長に選ばれ、1933年まで中華全国基督教協進会の総幹事を勤めた。大会中、誠静怡は中国教会を代表して「教会の宣言」を発表し、中国教会の自伝、自治、自養の実現を求めた。<sup>(6)</sup> 1927年に中華基督教会が成立して、誠静怡は初代の会長として選ばれた。1934年から1939年11月15日に上海で病気のため亡くなるまで総幹事として貢献した。彼は中国キリスト教会を代表して1928年のエルサレム世界宣教会議に参加し、会議の副議長に選ばれた。さらに彼は中国キリスト教会の代表団を引率して1938年インドのマドラス世界宣教会に出席した。誠静怡は1910年以来唯一三回の世界宣教会議に出席した中国人キリスト者代表であり、彼の遠見卓識、驚くべき能力は高く評価された。彼は近代中国のキリスト教史において、直接に様々な教会運動を提起、指導し、また優れた語学力と指導力、雄弁の才能、流暢な文章によって、国内においても国際的にも尊敬された。

## 2. 中国教会の自立への動き

最初のプロテスタント宣教師モリソン(Robert Morrison)が、1807年に中国に到着して以来百年を経た1906年の統計によると、中国人の信徒は178,251名で、中国人牧師はわずか345名であった。<sup>(7)</sup> 中国人牧師数の成長率は中国人信徒の成長率よりはるかに低いのである。ある中国人教会指導者は、「宣教師たちが中国教会のすべての権利を握っているから、中国人の同労者は中国の教会の主人ではなく、宣教師たちの雇う人である」と痛烈に批判した。<sup>(8)</sup> 20世紀に入ってから、このような状況が少しずつ変化し始めた。教会の支援によって、海外で神学教育を受け、帰国後教会の指導者になった中国人キリスト者が現れた。特に中国教会の指導者の中には、そのような背景をもって、成長した例は少なくない。誠静怡、余日章、劉廷芳などである。

アヘン戦争以来、中国にいる宣教師は本国の政治保護を受けた。西洋列強と中国の間で結ばれた不平等条約によって、一部の宣教師たちは不平等条約を利用して最大限自己の利益を守ることがを願った。さらに19世紀はまさに西洋文化が他の文明に対して圧倒的な優位性を確立した時期であり、一部の宣教師たちは、自国の文化に対して自負し、また中国の文化を時代遅れの愚昧で

(5) 山本、前掲書、43頁

(6) 卓、前掲書、280頁。

(7) 山本、前掲書、19頁。

(8) Chengting T. Wang, "The Importance of Making Christianity Indigenou", International Review of Missions (Vol. 5) 1916, p85.

頑固なものと考えた。彼らはいわば救世主の立場に立って、こうした自分の主観的な信仰理念を中国人に強引に押し付けた。そのため、宣教をする側と宣教をされる側の対立がますます深くなった。中国人は全力でキリスト教の伝来を阻止した。反キリスト教、反宣教師の意識が高まった。

そのような厳しい社会情勢のもとで、誠静怡は教会の指導者として、勇敢に立ち上がった。1910年に教会の推薦を受けて、彼はエディンバラで開催された第一回世界宣教会議に参加した。彼は中国の信徒代表としてはじめて西洋の教会に向けて中国の教会における自立を訴えた。彼は「中国教会」の重要性を強調し、西洋の教会による中国での教派主義を強く批判し、「私たち中国キリスト者は、あなたがたの教派主義には興味がない。私たちは近い将来に中国で教派を越えて、合同教会が成立することを願っている」<sup>(9)</sup>と公に宣言した。この勇敢な宣言によって、彼は中国のキリスト教界において有名になり、指導者としての地位が固まった。

エディンバラ会議以後、誠静怡は自分がエディンバラ会議中の講演において提起した主題に基づいて、「中国教会」の中心的地位の擁立のために貢献した。誠静怡は「中国教會的当前任務」において、中国の教会が過渡期の状況にあるという重要な考えを提出した。彼は「国家と同様に、教会も、現在移行期を経過しつつある。キリスト教宣教師は困難と希望、励ましと落胆に直面している。それには、忍耐強く、適切な対応が必要である。時代は中国宣教の時期から中国教会の時期へと移り、ゆっくりではあるが、しかし着実に、中国における教会 (the Church in China) の時期から、中国の教会 (the Church of China) へと移行している。第一期の時代を通して、事業がヨーロッパ宣教師の手にまったく委ねられていたのは、必然であった。第二期においては、東洋と西洋の双方の人々による共同作業と協力が絶対的に必要である。第三期において、我々は中国教会がそれ自身の責任を引きうけるようになる時代を希望できるかもしれないし、西洋の宣教師たちはさらに他の地域へ行って伝道することもできる」<sup>(10)</sup>と述べた。

誠静怡が最も注目したのは、中国の教会と西洋の教会の関係である。すなわち教会の自立と連合・合同の問題である。この問題に対して、誠静怡は大胆に様々な意見を表明し、提案を行った。この誠静怡の意見と提案には、それ以後彼の中国におけるキリスト教本色化思想に関する二つの中心的な論点、つまり、一、中国におけるキリスト教は過渡的段階にある。その段階の一切の働きは中国の教会を中心とする。二、その段階において西洋の教会と中国の教会は緊密に協力し合い、教会の連合・合同を目指す。それは教会内部の分裂や教会同士の対立ではない、という本色化思想の基礎が示されている。

1913年3月11日～14日に上海で開かれた第四回キリスト教全国大会は、宣教師と中国人指導者の協力のための土台を築いた。今回の大会は以前の3回の大会と違って、初めて中国人代表者が出席し、その数は全代表者115人の中に3分の1を占めた。<sup>(11)</sup> これらの中国人代表者を見て、西洋宣教師は、「中国の教会は良き指導者に恵まれていることを、われわれはこれまでになく今

(9) 査時傑『中国基督教人物小伝 上』、台湾中華福音神学院出版社、123頁。

(10) C.Y.Cheng, "The Chinese Church in relation to Its Immediate Task", *International Review of Missions* (Vol. 1) 1912, p383.

(11) 山本、前掲書、33頁。

日確信することができる。中国人の能力、信仰に対する情熱、成熟した考え、そして討論において示した健全な批判などを見て、非常に嬉しく感じた。中国の伝道事業に新しい時代が始まったに違いない<sup>(12)</sup>と評価した。この大会において中国人指導者は、宣教師と対等の地位に立って、大胆に自分の意見を述べ、様々な問題について討論した。このように、中国人信徒は宣教師の助手から宣教師の同労者へといわば身分を変更し、宣教師と共に宣教の責任を負う時代に突入したのである。

### 3. 誠静怡の本色化思想

20世紀初期、中国教会の外においては、新文化運動・五四運動とそれに続く1920年代のナショナリズムが盛んになり、教会の内においては、中国キリスト者の質的成長が見られた。特に1922年4月、北京郊外の清華大学において「世界基督教学生同盟」(World Student Christian Federation: WSCF)大会が開かれ、その大会を契機として全国的規模の反キリスト教運動が起った。反キリスト教運動の期間中、中国の文化人や知識人はキリスト教に対して猛烈な批判を展開した。反キリスト教運動におけるナショナリズムは教会に大きな打撃を与えた。そのような背景のもと、中国キリスト者の中にも中国教会の発展について反省し、本色教会の言論と著作が多く出版された。中国教会の代表的な指導者である誠静怡は、この時期にも重要な本色教会の論文を発表したが、ここで彼の論文を用いて、誠静怡の本色教会思想の内容を分析したい。

まず、誠静怡は「本色」について次のように説明している。「本色という二字を狭義に考えれば、それは本郷本土に成長したものという意味である。昔中国にはキリスト教が無かったのであるから、キリスト教は どうして本色と言い得るか。また本色の事物は必ずしも非本色より優れているとは限らず、今日のように水陸空路の交通が便利になれば、敢えて本色を望むことはない。それではなぜ、中国の信徒が一致して本色を提唱するのであろうか。……中国キリスト教会の方針は、中国と西洋との文化の優れた点を融合し、長所を選び短所を棄て、精粹をとってひろく用いて、わが教会を固めることである。それがいけないと誰が言うだろうか」<sup>(13)</sup>

次に、「本色教会」とは何か、中国において本色教会が存在できるのか、という点であるが、誠静怡は1920年代に発表した論文の中でこれらの問題に答えた。「教会は中国人の能力に適應する。中国人は自由に、完全に教会の働きを決定する。二千年間進展する中で、キリスト教はすでに各国の色彩に染まっていた。古くはヘブライ、ギリシャ、ローマが、後には欧米各国の思想と習慣がキリスト教に影響を与えたのであり、将来東方においてキリスト教はこの先例からどうして逃れることができようか。キリスト教は世界において、どの時代、どの国家にあっても、依然としてそのキリスト教たるものを失っていない。各国に伝わって、その国の文化の色彩を帯びても、キリスト教は懼れることはない。中国においてキリスト教の本色化は必然な発展過程である。キリスト教は中国のキリスト教になり、中国人生活に適應できるキリスト教になる。なぜなら、

(12) “The Chinese Record”, April, 1913, pp195-201,207.

(13) 誠静怡「本色教会之商榷」『文社月刊』、第1巻第1冊、1925年、9頁。

キリスト教はどんな地域においてもその民族の文化、習慣、環境と一体化するからである。キリスト教は適応力ある宗教である。ユダヤ人にとって、キリストはユダヤ人であり、中国人にとって、キリストは中国人である。中国にいるキリスト教は、必ず中国のキリスト教になる。<sup>(14)</sup>

また、誠静怡は本色化の意味について次のように説明した。「私が提唱する本色化は二つの意味を含んでいる。1、東洋におけるキリスト教を、いかに東洋人の「需要」に適合させるか、キリスト教の諸活動を、いかに東洋の習俗、環境、歴史、思想と融合させ、数千年の結晶の文化に、人の心に深く入り込ませるか、ということである。2、教会の一切のことを、中国信徒の負担責任とすることである。東洋固有の文明を発揚し、一刻も早くキリスト教を「洋教」という悪名を取り除く」<sup>(15)</sup>と。

以上の誠静怡の説明から判断すると、彼にとって本色化とはキリスト教の本質が変わることではなく、その意味は信仰がそれぞれの民族らしい特徴によって表現されるということである。彼の本色化について考えは、非常に明白であり、それには本色化が二つの意味で用いられている。一つは、東方に固有の文明を発揚し、中国文化の精華を吸収し、中国と西洋との文化の優れた点を融合することによって、キリスト教から可能な限り洋教の色彩を取り除き、中国の民衆に認められ得るものとするところである。すなわち、本色化とは、中国人がキリスト教を本格的に受容した時に、自然にできあがる融合であり、中国文化の特質とキリスト教の本質とが融合されたものである。<sup>(16)</sup> 第二の意味は、中国の信徒が自ら教会の責任を負うこと、つまり教会の自治・自養・自伝を実行することであり、行政においても経済においても牧会においても、中国の信徒が主体となり、外国宣教師は副次的な地位に退くということである。

さらに、誠静怡は、中国の「孝親」「敬祖」の思想が教会において具体化されることを訴えた。彼は中国人が設立した伝道機関では、伝道師の待遇に、俸給の他に種々の項目があり、その一つに伝道師の父母に対する援助があるが、これは「東洋の孝親の思想」であり、「子の職を尽くす」として本色化の具体化である、と述べている。また、一定の日時に墓地に集まって祖先を記念する礼拝を行うのもキリスト教的な「敬祖の方法」であると強調した。<sup>(17)</sup>

誠静怡の本色化についての考え及び説明は、当時においては、非常に進歩的、積極的であった。外国宣教師の中には遠くまで見通す見識の士も少なくはなく、歴史の発展する潮流に順応して、誠静怡が考えた中国教会の本色運動を積極的に支持する者もいた。彼らは中国民衆の反帝国主義闘争に深い同情を表し、完全に中国人が三自する教会を打ち立てるよう主張していた。中国の教会が本当に自治・自養・自伝を実現すれば、西洋ミッションの経済負担もかなり軽くなるという利点もあった。また中国人キリスト教指導者たちも、誠静怡の本色化の理念に対して、キリスト教雑誌や出版物において、賛同の意見を次々に表明した。

(14) 誠静怡「中国基督教的性質と状態」『文社月刊』、第2巻第7冊、1927年、56頁。

(15) 誠、「本色教会之商榷」、9－10頁。

(16) 山本、前掲書、269頁。

(17) 同上、268頁。

#### 4. 誠静怡の本色化の実践

中国の教会にとって、本色化についての討論を進めていくのは大切なことではあったが、更に重要なのは行動であり、実践であった。本色教会問題について、「実践は研究よりもずっと重要だ」と、誠静怡は指摘している。もちろん、実践は一挙に成功するはずがなく、少しずつ時間をかけて、徐々に推し進める必要がある。この点で、誠静怡は中国の教会発展のために大きな実践的な貢献を行った。

誠静怡が論じた本色化の実践的な問題の中で、最も重要な部分は中国教会各教派の連合である。本色化した中国教会は自身の弱い立場を克服するために、西洋ミッションが中国へ伝えた教派的な背景の相違を破棄し、教派間の連合・合同と協力を目指す。そして中国における各教派は外国教派を背景とした相互の壁を壊し、教会の「洋教」という色彩を取り除くのである。

本色教会の実現について、誠静怡は、「本当の本色教会を実現するため、宣教師たちは教会の管理から手を離し、中国人に教会の管理をさせるべきである。中国人が教会のすべてのことに対して負担責任を取るならば、教会の特徴や色彩は自然に本色化にする」<sup>(18)</sup>と考えた。この本色教会を実現するための具体的な実践としては、中国教会の連合・合同の促進などが挙げられるが、その中で最も代表的な実践は中華基督教会の設立であった。

数年にわたる準備を経て、1927年10月上海で最初の全国総会が開かれて、全国組織の「中華基督教会」が正式に発足した。全国総会に参加した88名の代表のうち66名が中国人の指導者で、彼らは12の教区と51の分区とを代表していた。中国全土で14の教派が中華基督教会に加盟し、数百の教会堂を所有し、会員の数は12万を超え、全国キリスト者人口の約三分の一を占めた。会議では全会一致して誠静怡を初代会長に選び、参加したあらゆるメンバーが明確に旧教派の思想を放棄し、“教派を超え、一つにする”という原則に基づいて、本色教会運動を推進し、中国教会の総体的な合一を目指した。中華基督教会は、中国人信徒が正統な信仰に根ざして、自分から主体的に動いて結成した中国国内の最大の超教派の連合・合同教会であった。教派的伝統を奨励せず、国の境界によって分かれたれず、ただ中国の社会情勢に適合することと、中国社会の需要に対応することが求められた。<sup>(19)</sup>

中華基督教会はちょうど中国国内の反キリスト教運動の終わりの時期に成立した。反キリスト教の破壊的な影響のもとで、教会堂は軍人によって占用されたり、教会の財産が略奪されたりし、西洋宣教師たちは中国から離れ、教会の経済的な支援がなくなるという厳しい時期であった。誠は、「中国の教会は非常に悪い社会情勢の影響で、完全に停止状態に陥り、正常な活動は出来なくなり、信徒たちの間も信仰的に動揺や消極的な傾向があらわれた。本当に心悲しくて、精神的に不安を感じる」<sup>(20)</sup>と述べている。

(18) C.Y.Cheng, "The Development of an Indigenous Church in China", *International Review of Missions*, (Vol. 6), 1923, p374.

(19) 姚民权・罗伟虹『中国基督教簡史』、宗教文化出版社、2000年、187 - 188頁。

(20) 誠静怡「向未走过的路」『中華婦主』、102 - 103期、1930年、3頁。



このような状況に対して、1929年に誠静怡は杭州において中華基督教会総会を開き、激動的な情勢の中で教会復興の対策を探った。会議中、誠静怡は参加者に向かって、「今日中国の教会が直面している状況は本当に厳しいものである。多くの方は落胆したゆえ、教会の発展にとって、不利な状況に陥った。私たちは一刻も早く良い解決方法を見つけ、信徒の信仰をもう一度熱くさせ、停止した教会活動も復興させるのである。なぜなら、死地に活路が開け、これこそキリスト教信仰の偉大さである」<sup>(21)</sup>と訴えた。大会参加者たちは誠静怡の訴えに応じ、様々な慎重な討論を行った結果、中華基督教会の中に「五年運動」を展開することになった。その運動を通して、各地の教会と信徒は奮い立った。誠静怡は「五年運動」執行部の委員長として、「主よ、あなたの教会を奮起させ、私を奮起させよ」というスローガンを提起し、キリスト者の霊性の復興によって、勇敢に福音宣教を成し遂げることを強調した。<sup>(22)</sup> 誠にとって、「五年運動」の目的は、教会内部においてはキリスト者の霊性を奮起させ、教会外部においてはキリスト教宣教を展開することであった。彼はこの二つの目標が相互補完の関係であり、どちらかに偏ってはならないと認識した。<sup>(23)</sup>

さらに、「五年運動」を促進するために、執行委員会はいくつかの促進方向を決めた。誠静怡の説明によると、第一、宗教教育の改善である。聖日礼拝、日曜学校、信徒の家庭において宗教教育を実施し、信徒の全体宗教認識を引き上げる。第二、信徒に読み書きを勧める。中国は長い文明を持つにもかかわらず、全人口半分以上は字が読めないというのが当時の現状であった。多くの信徒が字を読めるように、全国各教会で信徒の基礎教育を行い、五年以内に、信徒全員が聖書を読めるように努力する。第三、信徒の家庭を一単位として、宣教し、家族全員キリスト者になることを促進する。中国は家庭を極めて大切にす国であり、国家の発展は各家庭を基礎としている。教会もこのような伝統文化を重視し、信徒の家庭を中心として、福音宣教を行う。家庭礼拝や家庭聖書研究会の増設などである。第四、若者への伝道を重視する。若者は国家、社会、教会の未来の希望であるので、教会にとって、若者への伝道は大切である。若者と強い関係を結ぶならば、教会は社会における若者の問題を解決できるし、若者の社会奉仕に対する機会提供が可能になり、若者のキリスト者の生活は豊かになる。第五、受託主義の実施である。信徒を受託主義の立場から訓練する（献金と奉仕の訓練）。個人の時間、才能とお金は神から委託されたものであり、信徒一人一人は神の僕である。教会の自立、自養、自伝を実現するために、力を尽くすべきである。第六、福音宣教の促進である。すべての信徒は自分の親族や周りの人々へ伝道する責任を果たす。<sup>(24)</sup>

当時の教会内部の指導者たちは、誠静怡が指導したこの運動を中国キリスト者の自伝運動として評価した。ある教会指導者は「教会の責任は個人、社会、国家、世界を救うことである。それを全うするために、努力しなければならない。キリスト者は福音宣教をする時、個人、国家、社

(21) 誠静怡「五年運動的浅近説明」『中華婦主』、第102 - 103期、1930年、23頁。

(22) 誠、「向未走过的路」、3頁。

(23) 蕭楚輝『奋兴主教会』、香港証道出版社、1989年、18 - 20頁。

(24) 誠、「五年運動的浅近説明」、31 - 32頁。

会を救う使命を果たせるのである。中国の教会が自立、自養できないのは、福音宣教（自伝）をしていなかったためである。もしすべてのキリスト者が福音宣教をするならば、自立、自養できるはずである。」<sup>(25)</sup>と述べた。

誠静怡が提起し指導した「五年運動」によれば、教会は時代の需要に応じ、当時の中国社会の状況と中国文化の特徴を十分に考慮して、中国人信徒による自伝を実行しなければならない。そのために、教会には自治と自養の目的の達成が要求されたのである。

## 5. 結論

中国におけるキリスト教発展の歴史から見れば、中華人民共和国が成立した1949年以前には、真に三自を実現した教会はわずかしかなかった。多くの教会は人事面においても、経済面においても、宣教師や西洋の教会・ミッションに頼っていた。勿論、中国の教会が自立できない原因は様々にあるが、宣教師と西洋の教会・ミッション側にも原因があり、中国人信徒自身側にも原因がある。誠静怡は中国教会にとって、特にキリスト教本色化運動の実践において、偉大な指導者であった。彼が考えた教会の本色化理念は当時の社会状況において完全に実現できなかったが、それが進歩的かつ実行的な考え方であることは否定できない。誠静怡が務めたキリスト教協進会は多くの中国教会と西洋教会・ミッションを代表する機構であり、中華基督教会は当時の中国の国内において最大の合同教会であった。こうした状況の下で、中国の教会と西洋の教会・ミッションを連合・合同し本色化するの、当然の選択である。誠静怡は西洋の教会・ミッションから教会の主導権を中国側に移行し、中国教会は教会のすべての責任を負うように希望したが、それは決して急進な変革ではなく、時間をかけてゆっくり進む過程であると考えられた。

誠静怡は趙紫宸、呉雷川、劉廷芳などのようにキリスト教を中国文化と融合することについて深く研究をしなかったし、理論的著作もそれほど多くはなかった。しかし、誠静怡は早い時期において本色化思想を考え出し、中国教会が最も困難な状況の中で発展する方向を示した。この点で、誠静怡は、他の教会指導者よりも豊かな実践的経験を持っていたのである。彼は教会の牧師になり、長期にわたって全国規模の合同教会の責任者と指導者として務めた。彼は国内外の教会事情をよく知っていたし、生涯を通して中国教会の本色化運動に力を尽くして貢献した。彼は祖先崇拜の問題や、中国の教会と西洋の教会・ミッションの関係や、宣教師と中国信徒の関係などの問題を上手に調整した。その意味で、彼は単なる思想家ではなく、むしろ本色教会の先駆者、実務家であると評価できるのではないだろうか。

(Xu Yi Meng 関西学院大学研究員)

(25) 祖起舞「基督徒五年倍進運動」『真光』、29：4、1930年、22－26頁。

